

# 山田詠美『晩年の子供』論

—〈倒錯〉と〈関係〉の中の存在感覚—

佐藤洋一

## はじめに

山田詠美の短編集『晩年の子供』（一九九一年一〇月、講談社）は、表題作の『晩年の子供』（「新潮」一九九〇年一月号）を冒頭に八編の作品が収められている。最も早い時期の作品は『花火』（「小説現代」一九八九年八月号）、最後は『ひよこの眼』（同）一九九〇年一〇月号）である。

『ベッドタイムアイズ』（一九八五年一月、河出書房新社）『指の戯れ』（一九八六年四月、同）等とはやや異なる、少女や少年を題材とした作品の系列では既に『蝶々の纏足』（一九八七年一月、同）『風葬の教室』（一九八八年三月、同）が発表されており、短編集『晩年の子供』も、巨視的にはこうした〈少年少女論の系列作品〉につながる作品とみることができる。

これまで、山田詠美の作品については、黒人や風俗、性愛の描写といった特徴的な素材・題材に引きずられた論考、或いは、

それらの一部を断片的に組み合わせた作家論等が多い。また、感覚と欲望、性と愛、恋愛論等の視点から切り取った同時代批評や考察等は、まだ、作家と作品の固有の魅力を全体的に照らし出す評価軸とはなりえていないのが現状である。<sup>〔詳〕</sup>本稿は、山田詠美の現代的な魅力を短編集『晩年の子供』を通して、主に小説における「方法」と「文体」、その特質と構造という点から考察するものである。

## 1、〈小さい者〉の感情教育

「あとがき」（一九九一年九月五日）は、この短編集の背景や執筆動機をよく語っていると思われる。はじめに「あとがき」を通して、作品の背景や方法意識の一端を簡単に確認しておきたい。

実体験としては、幼い頃父の転勤に伴う転校でいくつかの地方都市に移り住んだことがこれらの作品の背景としてあること、

特に静岡県磐田市での数年間は瑣末なことも含め「一生忘れることはない」と語られている。この短編集はこうした体験を中心に自然・季節・人間関係による「自己」発見と形成（感情教育）を描こうとしたとみることが出来る。しかも、これらの「無自覚な季節との戯れ」が作家的発想や感性の基礎の一つとなつているとも語られ、山田詠美の方法意識や発想の中でも重要な位置を占めていることがわかる。

「無自覚な季節との戯れ」の感情教育とは、「自然も人間関係も時の流れ、すべてが、私の前に両手を広げて」いる状態の中で「心を痛めることも、喜びをわかち合うことも、予期しない時に体験」してしまった少女時代の、ある成熟を意味する。しかし、それは、一方で「かたよった世界」であったことをも自覚するのである。この「心ならずも習得してしまった自分を小さい者として見直す方法」が、『短編集『晩年の子供』』の基本的な方法と文体である。つまり、豊かな感情教育の時期を「小さい者として見直す方法」であり（小学生や思春期の少女を中心人物として表現の視点として）、多くの発見と自己形成の成熟とその偏り、その視点の逆転や驚き、その記憶を描くことであるといえるだろう。

また作品群の基調になつている感情は「あらゆる種類の郷愁」であり、「希望、絶望、揺れ」が描かれていく。これらは、山田詠美の作品の中で独特の使い方をされる「せつなさ」の感覚や、「内部感覚」の描写等に象徴的に描かれていと読むこと

ができる点である。こうした方法意識と文体が典型的に表れた作品と読むことができるものは、表題作『晩年の子供』と『堤防』（『小説現代』一九九〇年六月号）の二編である。以下、この二編の検討を通して、作品の構図・方法・文体等の特質について考えたい。

## 2、△晩年▽からの視線

### (1) テーマと構成

『晩年の子供』は、夏休み中に飼ひ犬に手を噛まれ、狂犬病で狂死すると勝手に思いこんだ一〇歳の少女の、数カ月間の生と死についての感覚と思索の物語である。「私は、かつて晩年を生きたことがある。」という過去の回想形式の冒頭部分で始まり、「いつのまにか、石たちは、どこかに行つてしまひ、もう惜しいとも思えなくなつてしまつた頃には、私の晩年もどこかに消えてしまつた」と閉じられる。

「晩年」を生きたこと、死への親しみと思索の場面（心理描写）は太宰治『晩年』や志賀直哉『城の崎にて』のアイロニーとも読むことができるが、それはともかく、一〇歳にして「晩年」を生きたという、混乱し逆転した少女の思考（いわゆる倒錯）の中で、生と死、愛情等についての真実がユーモラスに語られることがこの短編のテーマである。場面構成は、子どもにとっての非日常的空間である「夏休み」の場面から始まり、小

学校と学校の場面（小学生にとっての日常生活空間）へ、そして生と死の境界を象徴的に表す「墓地」の場面、最後は暖かい家庭という日常的場面へと復帰する構成である。

## (2) 意識と無意識の文体

暑い夏、とても「退屈」している「少しばかり、風変わりな子ども」である私は、伯母の家で飼い犬チロに手を噛まれ血を流す。テレビで少年忍者が犬に噛まれ、六か月の潜伏期間を経て発狂死する（狂犬病）ことを知り、「六か月後に死を迎える人間」という考えは固定観念として確信となる。忍者のテレビ番組から現実の発狂死に飛躍する幼稚な論理は、思い込みの強い少女期の発想として、ユーモラスだが自然に設定されている。

さて、特徴的なのは死の意識からの心理の変化過程の描写である（「意識と無意識の文体」と名づける）。変化の過程は、大きくⅠ～Ⅲ場面と三つの場面に分けて整理することができる（傍線は佐藤による。以下同じ）。

### I 場面

（自然や環境の変容と、現実の意味の発見）

A

死を意識してから、私のまわりとうごめくはつきりと形をもたないもの、たとえば、季節、たとえば時間、そういったものが、急速に姿を現し始めていた。色を持ち、意思を持ち、私に向かって歩き始めていた。そして、

B

周囲の人々、それは主に家族のことだが、彼らが私の周囲に形成する感情のモザイクのようなものが、まるで積木のように重ねられていることも知った。彼らの私に対する感情には、まったく隙間がなかった。母の私に対する思いを手でつまみ、空気の中から、一時的に外そうとすると、その空白を父や妹の感情の塊かたまりがおぎない、埋めるといふ感じだった。『晩年の子供』一六〇七頁（佐藤）

かつて、「退屈」することや「誰からも見捨てられているという気分」を楽しんでいた少女は、今、自分を取り巻く「はつきりと形をもたないもの」が急速に関心の対象となり（A）、濃密な時間と感覚（B）の中を生きていることを感ずる。さらにそれらの存在感覚は、次のような家族の愛、幸福についての認識として語られる。

C

私は、初めて、家族が愛し合うことに、真空状態が存在しないことを知った。私の周囲は、濃密な他者からの愛で満たされていた。そして幸福な人間は、そのことに気付くことがなく、そして、だからこそ幸福でいられるのだということに私は気付いた。幸福は、本来、無自覚の中にこそ存在するのだ。私は父と母と妹を見て、つくづくそう感じた。その中で、私は、ひとり不安を背負い込んだ。自分が愛に包まれていると自覚してしまった子供ほど、不幸なものがあるだろうか。（一七頁）

自然や環境の変容とその感覚（A、B）から現実の意味や深

みの発見（C）という過程の描写は、かたちを変え、意識の表層から深部への下降として繰り返される。

## II 場面 「外部」の変容と「内部」の発見

A 秋はいつのまにか、匂いすら放っていた。橙色の柔らかな陽ざしは、私の瞳ばかりでなく、鼻までも刺激して、私をたまらなくさせた。落ち葉を踏みしめながら、私は心の中で叫んだ。わかったから、あなたが私の側にいるのは、よくわかっているのだから。 私は、秋に、そう

B 伝え、聞き分けのない恋人をなだめるように、やさしく息を吹きかけ、抱きしめた。私は男を愛するという言葉すら、その時、知らなかったが、そういうやり方で、秋を愛した。（一八頁）

少女は、自然（秋）の人間化、自然を愛することと「男を愛する」ことのナルシステックでせつないほどの感覚の蕩揺（B）を感じる。一方、これまでの「おしゃまん」としての教室での自分の地位の偽善と愚かさ（罪の意識と恐怖という無意識）にも気付き始める。

私は、かなり、それまで、色々な子供たちを洗脳していたように思う。あの子は嫌い。私は、気に入らない子供を見つけると、そう高らかに宣言した。それを聞いた何人かの子供たちは、私の言葉によって、名指しされた

子供を理由もなく憎んだ。私は、自分には何の責任もないと信じていた。私は決して、自ら、手を下して、人を苛めるような愚かなことをしなかったから。（略）

C 私は、晩年を迎えてからというものの、その子たちに対する罪悪感にさいなまれるようになった。私は、自分のしたことの残酷さを悟り、いてもたってもいられなかった。私には、解り始めたのだ。私が、彼らを排除すべく、他の子供たちに行動をおこさせたのは、恐怖からだったということ。私が、嫌いだと叫んだ子供たちは、皆、ある意味で私に似ていた。（一九頁）

その後、いままで経験したことのない「心を使うことに多忙」な日々を送る中で、学校の本を盗んだり、ピアノに悪戯をしたりと常軌を逸した未知の行動を繰り返す。次の場面は、こうした行動の最後にしようとして理科準備室から標本の石を盗み出す場面である。

## III 場面 「死への親しみと認識、境界の喪失」

A 石灰石や凝灰石や雲母、なんと水晶まで無造作に箱に放り込まれて、棚で、息をひそめていた。／私は感激のあまり、胸が痛くなった。私は、自分の心臓が、酸を味わった舌のように、きゅんとくぼむのを感じた。私は、石に囲まれて、すべてのことを許しつつある自分に気付い

た。(略) 夕陽を浴びて、きらきらと輝く雲母を、私

は一枚、丁寧丁寧に剥剥した。その一枚に見えたものは、羽のように薄い雲母が重ねられたものだった。ちっぽけに見えて、歴史を背負っているその石を私は、きつく握りしめた。なんて、可愛いやつ。漠然と自分の後ろに広がる何かを思い切り抱きしめて喜ばせてあげたいような気持ちに駆られた。(略) 石は、皆、死んでいた。そして、私は、それらを、心から愛した。(二一―二頁)

石という無機質な物質への親密な感覚(A)、石の中に生きている太古からの歴史と時間への共感(B)は、やがて無機質な物質(死)と化する自分への同化であり、墓地での自己の生と死についての認識につながるものである。

墓地では墓の前にひざまずき、盗んだ石を十字架の前に並べ、時を過ごす。

A 私は、石やお墓に親しみを感じていた。ここにいる沢山の死んだ者たち。私も、いづれ、この仲間入りをするの  
だ。そんなことを考えていたら、時間が止まったような気がして、思わず、あたりを見まわした。いつものように空気が漂い、私の体を隙間なく覆っていた。けれど、それは家にいる時のようなせつない思いを抱かせなかった。私は、まばたきもせずに、その場に座り込み、宙を  
B いらんでいた。私は、暖かな懐かしいものに包まれて、身動きする必要すらない、何の必然も持たない快楽に身

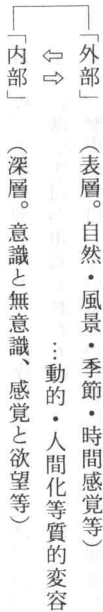
をゆだねていた。心配する必要も、怯おそえる必要も、悲しむ必要もなく、ただ自分がその場に存在しているという実感以外のすべてを失ない、そこにいた。私は、もしかしたら、今、死んでいるのだろうか。そんなふうにも思ったりした。いとしい者たちが自分と関わっているという、そんなことも思い出しはしなかった。並べられた石と同じ種類のものとして、私は、自分を取り巻くすべてのものを忘れていた。私は生きている。でも、これは死んでいることに、とても良く似ているに違いない。私は、そう思い、そのことが何の孤独も呼び覚まさないことに少しばかり驚いていた。(二四―五頁)

濃密な時間感覚の中、石やお墓への親しみを感じる。だが、それはこれまでのような「せつない思い」ではなく「暖かな懐かしいもの」に包まれた快楽であり、「自分がその場に存在しているという実感」そのものである(A・B)。ここには、II場面までの死からの生の本質の発見という構図が逆転し、生と死の境界の喪失感と認識(C・生と死は対立するものではなく連続するもの)が語られはじめている。墓地はこの生と死の境界というイメージを象徴的に示している。この認識は少女の幼稚な論理となつて、すぐその後の場面で「私、生まれる前は死んでいた」「人間は、何度か晩年を繰り返すということか」と飛躍するが、小説の展開としては「晩年」と死が日常であるという安心感は少女が日常へ復帰するきっかけとなる。

『晩年の子供』を山田詠美の方法と文体という観点から見ると、他の七編に共通する方法的要素やモチーフとしての「せつなさ」の感覚や「境界」のイメージ（ここでは墓地）、暖かな「家族像」の意味等も重要である。

しかし、それらの特質の中で特に重要な点は、少女による語り（表現の視点）に表れる「意識と無意識（感覚・欲望等）」の文体、その構造と意味である。飼犬であるから狂犬病にはなるはずがないのだが、死を意識してからの少女の「日常性」が「非日常的風景」と化し思考の逆転した、いわゆる倒錯混乱した心理が、自然の変容・真の幸福と罪の自覚・無機質なもの（石）への親しみ等として語られていくことになる。日常と非日常の境界の区別がないような描写、幻想的で感覚的な錯覚の描写の中に、一〇歳の少女とは思えないような深い人生の真実がユーモアとともに描かれるのである。

自然や環境の感覚的変容から現実の意味の発見と認識という心理描写は、意識の表層から深部への下降として（意識と無意識の文体）繰り返される。これは、少女の存在感覚を次のようないわゆる「外部（表層）」と「内部（深層）」の二重構造から描こうとする態度といえることができるのである。



それはまた、四つの段階①～④を経て表層から深部へと描かれている。

#### ①段階 「外部」の変容

季節・自然・時間等「はっきりと形をもたないもの」の変容と人間化（感性・感覚の異常）

#### ②段階 現実と「内部」の発見

①自分を取り巻くものの本質の認識（家族の愛・幸福）

②自己の無意識の自覚（自分の行為の動機に

「恐怖」と「罪悪感」）

I・II場面

#### ③段階 「外部」の変容と「内部」の発見の深化、拡大

①学校での盗みや悪戯等未知の行動への興味と実践（認識から行動へ）

②かつて嫌いと言った男の子へ悪意を持っていないことを告げる（行動の変化）

#### ④段階 死への親しみと認識、境界の喪失

死を「暖かな懐かしいもの」として体験する（死と生についての認識）

III場面

そしてそれらの日常性の深部を感得した感覚や思索は、結局、狂死の恐怖が勘違い（倒錯）であったことがわかると同時に、作品末尾で消失してしまう構成であるが倒錯の過程に息づいていた希有な時間として「小さい者」の記憶は読者の脳裏に深く印象づけられるのである。

### 3、△倒錯▽と△関係▽

『堤防』という作品には、『晩年の子供』では後景となっていた幾つかの表現的特質が鮮明に表れている。それらを三点取上げ、山田詠美の方法と文体の特質の面から考える。

#### (1)△倒錯▽と自己発見

『堤防』は、幼い時のある経験から、劣等感と自己の無力が固定観念(倒錯)になった「運命論者」の女子高校生が、級友京子の恋愛と自殺をめぐる事件との出会いを通して、「運命」に身をまかせようという逃避(無意識)と「運命」を△自力▽で選択する△欲望▽のエネルギーの意味に気付くという物語である。

主人公の「私」は次のように設定されている。「私は自力で何かをするという才能に恵まれていない。それが私の劣等感を形作っている。そして、私は、その劣等感の存在を認めつつ今日まで来てしまった。後一步というところで、私は、いつとすべてを諦める。私には、能力以上に発揮することが、何ひとつとしてないのである」(『堤防』三一頁)。「私は、ただ運命に逆らわないようにしているだけなのだ。漠然とした危機感を感じると、すぐに、自分自身で選択することを放棄して、流れに身をまかせてしまうだけなのだ。ことさらに、誰かに反抗しよ

うとする気もないし、束縛から逃げようとする気も起きない。」(四五頁)。

「運命と私自身が呼ぶところのものが目の前に立ちはだかっている」と感じると、いつも「両手を上げて降参してしまう／運命論者」を、学校の先生や級友は「なんとかなるさ的な反抗的精神をもった危険な生徒／変わった人」、「ほのぼのしてる／何ものにもとらわれていない、みたいな態度」等とみる。つまり、他者からは人間と人生についてある種の達観した思想もっている人物として描かれているのである。

ただ、少女は「運命のレールを外れた瞬間力を発揮する人間」(自力と能動的な力への可能性)への興味はありながら、父との会話で「能動的な力を出すのって、私は、少し卑しいような気がする。それは、運命というより、欲望のエネルギーなんじゃない?」と語っている(四二頁)。与えられた運命に身を任せ(「人間は、常に選ばれるのを待っている」四五頁)ことの自然さ高貴さに比べれば、「欲望のエネルギー」の能動性は卑しいという認識である。こうした倒錯した認識を変えるのが級友京子の事件である。

#### (2)△関係▽の発見

仲の良い級友京子は妻子ある男性に夢中になり、妊娠までしている。京子は、受動的で無気力な「運命」等という言葉では片づかない、どうしようもない現実(恋と妊娠)と正面から闘

いはじめている人物（事件）として描かれる。「どうして、あんな男を好きになっちゃったのかなあ。まったく、どうかしてる。ねえ、これを運命だなんて言ったら、私、怒るよ。男と女の間ってね、そんなちやちな言葉で、納得出来るものじゃないんだからね。」「馬鹿ね。死ぬより、パワーがいるのが、男と女の関係ってもんよ」（四七〜八頁）。

「私」はそういう京子を、「自分のまったく知らない世界」（四七頁）の人間、「向こう側の人間」（四九頁）として、言葉を失って見つめるだけである。京子はその後、手首を切って自殺をはかり、結果的に流産する。京子は病室で、自殺の瞬間に感じた生へのエネルギーのことを語る。それは、同時に「私」の倒錯した幼稚な「運命論」への批評になっている。

生まれて初めて、私が、自力でやってのけたことが、自分を殺そうとすることだったなんてね。ねえ、確かに、運命ってあるのよ。そして、ちょっとばかりのエネルギーで、その方向をずらすことだって出来るんだよ。あんなの、あの海に落ちこちた話、よく覚えてる。落ちる運命は決まってる。でもね、海側に落ちるか、道路側に落ちるか、本人の力で左右できるのよ。ねえ、解る？

それが生きるって、ことなんだよ。（五三頁）

「私」は京子との△関係√、その恋愛と自殺未遂、「運命」への考え方を通して自己の「運命論」の歪みと倒錯に気がつく。潜在的に意識していた「運命のルールを外れた瞬発力を発揮す

る人間」（自力と能動的な力への可能性）への興味を自覚的な経験として開くのは、京子という「他者との関わり」なのである。ちなみに『晩年の子供』では、「他者との親密な関わり」のモチーフは、家族の愛と幸福の発見・自分の中の偽善と恐怖、罪悪感の自覚として、専ら「内部（意識と無意識）」における「他者との関わり」の発見と意味が描かれていた。

このように、△倒錯√した歪みをもつ人物の意識と無意識を描く時に、「他者との親密な関わり」を重要な契機として、対比的に深く語っていくという構造自体は、小説の方法としては特に目新しいものではない。しかし、△関係√の中で人物は孤立し、存在の崩壊解体する過程を通して現実や既成の秩序への批評を描く悲劇的な構造の作品とは異なり、ここでは人物の歪みが開かれ、存在感覚の深部や本質が△発見√される、いわゆるハッピーエンド型の構造になっている（人格形成過程を描く成長物語）ということが重要である。これは中心人物の設定によって規定される作品の方法という意味、つまり少女や思春期の女性を中心人物にしたためではない。山田詠美の作品に通底する△関係√と△存在感覚の発見√のテーマ、関係をいかに築いていくか、他者と関わる時に目に見えないけれども大切なことは何か、それを言葉で正確に描写するという発想、こうしたことに焦点が当てられ描かれているということが重要なのである。

尚、△欲望√のイメージと語彙は、山田詠美の作品の中では



多義的に使用されている。「堤防」では、∧関係∨を開く内部の力として、能動的な生へのエネルギーとして「私」の使う「運命」の意味とはほぼ対比的に使われている。

### (3) ∧境界∨と象徴性

この作品のテーマや構造を詩的に象徴的なものにしてはいるのは、「私」が堤防から海に落ちるエピソードである。小学生の頃の夏休み、家族旅行で海に行き、一人夕闇の中、堤防（防波堤）を歩く。気がつくと既に、潮が満ちて足下に波が砕け、危険な状態である。

この時「目に見えないものに、あやつられている自分」を生まれて初めて感じ、「金縛り」にあったようにたちすくみ、時間には流れる。不意にバランスが崩れ、反対側の道路側ではなく海に落ちる。その時、「波が自分を呼んでいるような／海に落ちる運命」（三四頁）を感じるのである。落ちた所は、腰までくらいしか水はななくすぐ立てる安全な場所であり、深刻な描写と実際のズレがユーモラスに描かれている。

このような、海や波の動きに吸い込まれるような奇妙な感覚の混乱はよく経験することだが、この夏の夕闇の中での意思を越える汎神論的感覚の体験は、この少女を「運命には逆らわれない／運命論者」にする。

それは、海側・道路側という日常における「世界の二重性」の象徴的な意味として、また、自分も含めた人間は「常に選ば

れるのを待っている」という達観（倒錯）につながる認識として次のように語られている。

あの白く長いコンクリートの道を隔<sup>た</sup>てて、世界は二つに分かれていた。海側は、あの時の私にとって運命であったし、道路側は、私と何の関わりも持たない世界だった。私はあの瞬間、海に選ばれたのだ。そして、直後にはつき放されたのだ。それと同じようなことが、日常にはいくつも横たわり、人間は、常に選ばれるのを待っている。（四五頁）

海側・道路側という「世界の二重性」と、∧境界∨としての堤防のイメージは、京子を自分の居る世界とは別な「向こう側の人間」（四九頁）と自覚する過程と重ねられ（大人の世界への通過儀礼）、∧境界∨に生きる「私」の∧倒錯∨と微妙な感覚を効果的に描いている。∧境界∨としての堤防のイメージは、ここでは一つには作品の象徴的で詩的なイメージとして、二つには山田詠美的世界を構成する「二つの世界」の基本構造を示すものとして重要である。

## 4、作品の構図と方法

『晩年の子供』『堤防』の二編にみられる構図と方法の要点を、他の六編とともにまとめたものが次表である。以下、特徴的な部分について簡単に述べる。

△作品の構図と方法▽

項目	作品 (初出)	晩年の子供 (90・1月号) 【新潮】	堤防 (90・6月号) 【小説現代】 以下同じ	花火 (89・8月号) 同	桔梗 (89・10月号) 同	海の方の子 (89・12月号) 同
△中心人物▽ (表現の視点と歪み・倒錯)	△構成▽と△関係▽ ・事件・人物 ・発見と認識 ・その他	十歳の少女 ・風変わりな少女 ・退屈 ・夏休み	高校生(女子) ・自力の欠如した「運命論者」 ・夏休み(海)	十九歳の学生 ・人生の本当の驚沢を知る(女子) ・夏	七歳の少女 ・同年令の子供とは異なる関心をもつ ・秋(桔梗)	九歳の少女(久美子) ・既に人生を撃ち抜く ・秋(夕陽と海)
方法と文体(主なモチーフ) (1)△境界▽のモチーフ(二つの世界) (2)詩的イメージ(象徴性) (3)△欲望▽△せつなさ▽のモチーフ、その他	(1)犬に手を噛まれる 狂死への恐怖 (2)家族の愛、真の幸福 生と死の本質	(1)根源的体験としての「堤防」のエピソード (2)友人京子の恋愛と自殺未遂、生への△欲望▽ (3)△自力と欲望▽の発見	(1)姉頼子の様子を見に行く (2)姉と高山さんとの出会い(恋愛と性愛すること) (3)男女の愛の本質の発見	(1)隣の家、植物、小川等への関心 (2)美代さんの悲しみと死 (3)日常のなかの深部(男女関係、家族)	(1)転校後「可哀想なひと」哲夫と出会う (2)哲夫と下校する(自分の思い上がり) (3)人間関係の本質に気づく	(1)「海の方の子」 (2)金色の西日の輝き△海の幻想(初めて人間のなかわりを知った喜び) (4)△瞳・眼▽の強調
	(1)墓地(生と死の境界) (2)自然、季節、時間の描写 「晩年のイメージ」 (3)生への愛しさと死への親しみ (4)意識と無意識の文体(内部と外部・感覚)	(1)「堤防」を境にした二つの世界 (2)堤防から落ちるエピソードの描写 (3)生へのエネルギーとしての△欲望▽ (1)姉の住む世界と「私」の世界 (2)花火の美しさと男女の愛 (3)愛することと関係の中の△欲望▽△せつなさ▽	(1)小川△二つの世界の境界△男女の関係 (2)小川を流れる桔梗の花(美代さん、女の悲しさ) (3)生と死(祖父、美代さん) (4)夢と幻想的な場面(夢、写し絵、性)	(1)「海の方の子」 (2)「町の子」の区別 (3)初めて人間のなかわりを知った喜び (4)△瞳・眼▽の強調		

迷子 (90・2月号) 同	蝉 (90・8月号) 同	ひよこの眼 (90・10月号) 同	備考
女子中学生 (雅美) ・男と女は案外単純に結びついてい るもの (1)隣の家には赤ちゃん (2)幼稚園児ひろ子が行 方不明となるがみつ かる(本当の家、家 族、愛) (3)家族と関係の発見	十歳の少女 (岡田真美) ・自分とは何 者かとの疑 問をもつ ・夏休み(蝉) (1)自分は何者か、生き ているかという問い (2)母の妊娠と出産(子 供出生の秘密を知る) (3)空虚(蝉)を生きる 人間 (4)真実(まみ)という名づけ	中学三年 (女子) (亜紀) ・解けない問 題をかかえ る ・秋(学園祭) (1)少女△期の作品系列(七〜十歳 位) (2)△境界▽期の作品系列(中高校生 等) (3)△死を見詰める眼▽ (4)△瞳▽の描写 (1)季節はずれの転校生 との出会い(相沢幹 生) (2)△瞳▽△懐かしい感 情▽の秘密を探る (3)△死を見詰める眼▽ (4)△瞳▽の描写	(1)二つの家族、血のつながりに よる他人と家族 (2)△迷子▽△ひろ子▽隣の家 の夫婦(男女関係) (3)おばさんの「憎しみ恨めさ」 掃ってきたひろ子の母とし ての怒り (4)「食・生」のモチーフ

(1)△倒錯▽と△関係▽  
『堤防』に顕著にみられる、いわゆる△倒錯▽と△関係▽の基本的な構図は、八編に共通しているものである。  
『海の方の子』は、数多い転校経験をもつ久美子(九歳)が、

哲夫という同級生との関わりを通して、他人を理解する本当の思いやり（愛情）に気付くという物語である。久美子は子供たちの中で常に自分を「小さな大人」であると意識し、「誰もが私を好きになること」に向かって努力することを自然なことで感じる「既に、人生を軽く」見ている少女である。学級で仲間はずれにされている義眼の「見離された子供／不幸で／可哀想な人」哲夫を慰めるために一緒に帰ることになる。両親とは死別し、祖母と暮らす哲夫は、久美子の幼稚な思いがりと偽善を見抜いており、逆に「私」のような者こそ「誰からも、（相手の）秘密を教えてもらえない／良い人のふりをするのは、一番、悪人」と言われる。久美子は、西日で金色に染まる田んぼと静かな夕陽の中の海の幻想的な風景に包まれる喜びを感じながら、哲夫が既に「可哀想な人」ではなくなっていること、哲夫への自然な好意とともに、自分のことしか愛せない歪んだ心が開かれていくことを自覚するのである。そうした△関係▽の幸福感は、部分的だが幻視する自然描写の場面によく表れている。

また、『ひよこの眼』では、中学三年生の亜紀が「季節はズレの転校生／妙に超然とした雰囲気」をもつ相沢幹生との出会いで感じた「彼の瞳に遭遇した時のあの懐かしい感情」の秘密を探るといふ構成である。幹生の眼に感じた△懐かしさ／せつなさ▽の感覚への執着は、「解けない問題を抱えているようなもどかしさ」という亜紀の固定観念となる。幹生へのこうした

関心は、級友からは恋の噂となるが、幹生の眼の深部に感じた△懐かしさ／せつなさ▽の感覚は実は、何もかも映しているように何も見ていない「ひよこ」の悲しい孤独な眼△死を見詰めている瞳▽への無意識の恐怖であることに気付く。やがて幹生は父の自殺の道連れとなって死ぬ。

この作品における人物の固定観念は、△懐かしさ／せつなさ▽の感覚への執着である。それは表層的には、解けない問題を抱えた「もどかしさ」の感覚であり、「自分に訪れた初めての恋」の実感であるが、深層的には死を見つめる視点から△関係▽の意義（「私が初めて出会った、人生に対して礼儀正しい人」との出会いと喪失感）を語るものである。

その他、『迷子』では「男と女は、案外、単純に結びついてるものだと、たかをくくっていた」小学四年生の雅美が、隣の夫婦の△関係▽を通して「人生、一筋縄じゃ行かない」と夫婦や男女△関係▽の深部に気付くという物語である。『火花』は、既に人生の「本当の贅沢」を知り「残りの人生」を楽しむ心境にあると思ひ込んでいる女子学生（一九歳）が、姉の恋愛を通して男女の愛と性の深部にある△関係▽の本質に気付くという話。『蟬』は思春期とも反抗期とも言えない時代を生きる一〇歳の「真実（まみ）」という少女が中心人物である。真実は「自分とは何者か／本当に生きているか」と考えている少女だが、母の妊娠と出産を契機に子どもが出来る秘密をはじめで知ることによって混乱する。しかし、やがて、母△私△蟬というつな

がりの中で、生の本質に△何か暖かいもの▽を感じ始めるとい  
う構成の物語である。

このように、中心人物はある固定観念、△倒錯▽と名づけら  
れる逆転した思考や認識を持つ少女や中高校生として設定され  
ていること、しかも、彼女達の認識や感性は部分的には子供や  
少女とは思えない成熟と達観を示しながら、全体的な文脈  
では歪んだものであるということがユーモアとともに描かれて  
いる。

このような人物が、ある親密な△関係▽をバネとして、自己  
の△倒錯▽や歪みに気付き、同時に、日常の深部（家族や幸福）  
・人間関係の本質（男女の関わり、愛すること等）を発  
見するという構図である。そして小説の魅力は人物の「成長」  
という結論や認識の意味にあるというよりは、親密な△関係▽  
が開く世界とその描写の過程にこそ表れているといえるだろう。  
△倒錯▽や歪みの設定は、親密な△関係▽が開く世界を描くた  
めの意識と無意識に関わる表現装置ということができるのであ  
る。

## (2) △境界▽と作品の象徴性

『堤防』では△堤防▽を境界として海側・道路側の「二つの  
世界」が象徴的に描かれていたように、『花火』『桔梗』『蟬』  
『ひよこの眼』等でも、いずれも作品の詩的なイメージが、あ  
る△境界▽のイメージや特徴的な描写で象徴的に描かれている。

『花火』では男女の素晴らしい瞬間としての△関係▽を△花  
火▽のイメージとして、『蟬』では「空虚⇨蟬のおなか⇨生  
の意味」を生きる存在の象徴としての△蟬▽のイメージが、また、  
△ひよこの眼▽は「死を見詰める瞳」のイメージとして描かれ  
ている。『迷子』では実際に「行方不明となる幼稚園児のひろ子」  
迷子だが、同時に、「本当の家（真の人間関係）」を持ってない  
「おじさん」「おばさん」もまた「迷子」として描かれてい  
る。

このような△境界（二つの世界）▽と象徴性を、とりわけ巧  
みに生かし描いているのが『桔梗』である。「小川（という境  
界）」を挟んで「私（七歳）」の属する平凡だが幸福な家族と、  
闇の中の何か不幸の匂いのする別な家族（美代とその母、時折  
訪れる美代の別れた夫）が対比的に描かれている。「小川」に  
流れる薄紫の桔梗の花は、愛されずに自殺する美代と重なり、  
美代の美しさや優しさは、その死を光源にして、男と女の不思議  
で不気味な深淵をのぞかせている（小川に流れる桔梗の花⇨  
美代の死⇨女の哀しさ、小川⇨二つの家族の境界⇨男女の関係  
の深部と境界）。

## (3) △せつなさ▽と△欲望▽のモチーフ

山田詠美の作品では△せつなさ▽という感情や感覚は重要で  
あり、多義的な意味で使われている。短編集『晩年の子供』で  
も、他者との△関係▽を表す重要な感性として使われている。

これについて、作者自身は次のように述べている。

「いわゆる、悲しさや苦しさと名づけられる感情とは異なるものであり、「心の成長」が必要な大人の感情である。「『せつない』という感情を作り出すフィルターは、ソフィスティケイテッドされた内側をもつ大人だけが所有する」のであり、「外側からの刺激を自分の内で屈折させるフィルターを持った人だけにゆるされる感情のムーブメント」であるという。洗練された「心の成長に比例して純度を増す」△せつなさ▽の感情は全く味わえない人もいるし、頻繁に味わう人もいる。<sup>(注3)</sup>

このように見ると、作者にとつての△せつなさ▽という感情とは、素朴な喜怒哀楽の感情表出の類ではなく、「外部（他者との関係・事件・出会い）」との△関係▽を、その「内部」でより根源的な意味として感受する、人間的で（「心の成長」が必要な）生理的感覚的フィルターであるということが出来る。それらは「刹那的／保存がきかない／その出所を明らかにしないたよりないもの」であるが、逆にそのことは、言語制度化される以前の「外部」への原初的根源的な感情・感覚として機能するのである。短編集『晩年の子供』でもこの△せつなさ▽という感情が、「外部」の刺激（関係や事件との出会い）を「屈折させるフィルター」として強調されている。

また、△欲望▽という言葉もしばしば登場し、作品の中で人物の「内部（内面性）」のありかたを語っている。感覚・食や性への執着＝生へのエネルギーとしての△欲望▽のモチーフは、

短編集『晩年の子供』では、主に、死・晩年の側からの「生・愛・幸福・家族・男と女」の意味と発見が描かれていることが重要である。

#### (4) △他者と関わる▽小説

大人になる前の少女や少年を主人公にした作品を書くことについて、山田詠美は、自分自身の生き方について迷い、根拠のようなものを掴んだ時期であると同時に、「人との関わりを持たなければ、生きている価値なんてない」とまでの強い意味で「人との関わりを知った時期／人と関係を作っていくこと」の大切さに気づいた時期であると語っている。<sup>(注4)</sup> また、孤立し解体する人物造型を中心とする作品ではなく「他者と関わる」恋愛小説としての意味を重視し、「目に見えないけれども確実なもの、他人と関わるときに大切なもの」が正確な言葉で描かれている恋愛小説こそが素晴らしいとも語っている。<sup>(注5)</sup>

自己の生き方についての迷いを経て根拠を掴んだ姿、その過程を△他者と関わる▽小説として描くこと、その時、内側の「屈折させるフィルター」としての△せつなさ▽という感情、他者への関心と生へのエネルギーとしての△感覚▽や△欲望▽は方法と文体として多面的な描かれかたをする。

関係の契機・根源の欲望としての「恋愛」や「性」も重要なモチーフの一つである。小島信夫との対談の中で、山田詠美は恋愛を描くことの意味について「（小説の中では）基本的なも

のを書けば、外側って書けると思うんですよ。基本的なもの  
というのは人間の感情だと思っただけでいい。(注6)

ここでの「基本的なもの」としての「人間の感情」とは、言い  
換えれば根源的で純粋な存在感覚の表れとしての感覚・欲望・  
関係と同義であると言えるだろう。身体と心の「生理的なもの」  
「純粋な感覚」という内部感覚(意識と無意識)を描くことが  
外部を描くことになるというのである。

題材としての「性」が拡大され描写されることに対しては、  
人間を描くのに「その世界では、あらゆる平等とあらゆる権利  
が常に逆転していて、うんと下の方で色々なものを見られるか  
ら」とも語っている。(注7)

山田詠美の場合、性・感覚を拡大し詳細に描くことは、「意  
識」と「無意識(潜在意識)」の往復と、両者の境界の逸脱を  
通して無意識が意識化される過程を描くことであり、意識の統  
制を超えた部分(深部)の中に人間性の本質感を探ることであ  
る。それは、男と女の構図、国家と個人の関係、また、社会の  
中の自己の歪み(倒錯)や「感情教育」(例えば、教育・信念・  
個性)等のありかを探ることもある。つまり、性・感覚といっ  
た一見曖昧で表層的な存在感覚を通して、現代の秩序によつて  
名づけられ、組み込まれる前のある本質感、精神と身体の世界  
領域、自己の無意識と意識の狭間で翻弄され、浮遊する現代人  
の意識の深部と本質を照射することにつながっているのではあ  
る。

## まとめ

短編集『晩年の子供』の魅力と本質は、何よりも、△倒錯▽  
した少女達の世界(外部)との「親密な関わり」の発見(成長)  
と、その過程で開示される人間的な本質感、そしてその優れた  
描写の構造にあると言えるだろう。△倒錯▽と歪みの世界に生  
きる少女達の逆転した認識と行動のユーモア、やがて、「親密  
な関わり」を契機に開かれる人間的な世界。大人への成長と  
いうかたちで主人公の少女達の歪みと△倒錯▽の世界は喪失す  
るが、その△倒錯▽した時代と「親密な関わり」の発見の中  
で見た世界の息づまるような存在感覚の本質感はややアイロニカ  
ルに強調され描かれている。そして、それは、匂いや感覚、象  
徴的で鮮明な記憶等の断片として、つまり、「郷愁」「やるせ  
ない感じ」(あとがき)といったある「せつなさ」の感覚とし  
て語りのなかで記憶され、語られていく。△倒錯▽と△関係▽  
△親密さ▽△欲望▽の中にある真理とユーモア、その文体は感  
覚・欲望・関係、外部と内部、表層と深層、特有のモチーフ等、  
山田詠美独特の文体で効果的に描かれている。

また、各短編はほぼ発表順に掲載されているものの、例え  
ばそれらを貫く△構成意識▽という観点からみると、はじ  
めの二編、『晩年の子供』と『堤防』が方法的にも表現の面  
でも典型的な作品であり、他の六編はそのバリエーションとい

ことができそうである。すなわち、ある「固定観念」にとらわれた中心人物の「倒錯」がユーモラスに設定されていること、これらの人物が「親密な関わり」を契機に日常の深部の意味の「発見」し成長すること、「二つの世界」と「境界」を表すイメージ、「せつなさ」や「死の視点からの生の発見（生と死）」「欲望」のモチーフ等がこの短編集の基本的な方法と文体を形成しているということである。

さらに、作品のみせる世界の内実を、設定される表現の視点としての人物像からみると七〜一〇歳の少女の感性を表現の軸にしている作品の系列、それより年長の思春期や中高校生・女子大生の系列の二つに分けることができる。後者の系列の作品は年令の設定は微妙な幅を持つが、それぞれある境界の時期にある女性であることが重要である。巨視的には、この系列で男性像を中心とした作品が短編集『ぼくは勉強ができない』（一九九三年三月、新潮社）、また、いわゆる大人の女性を中心人物とした作品の系列が『ベッドタイムアイズ』の作品系列となるといえるだろう。

## おわりに

このようにみてくると、短編集『晩年の子供』には山田詠美における発想や資質といった意味での作家としての原質と、小説の「方法」や作品系列の基本的な部分を読むことができる

品集と言うことができる。一言で言うると、「個人の親密な関わり」の一種の「楽しみ」（「基本的なもの」）を生理的感覚的文体とでも言うべき描き方で書くことによって人間関係の真理（存在感覚の本質感）を描くことが山田詠美の方法と文体の特質である。「親密な関わり」の「楽しみ」とは、恋愛の「せつない」感覚や「性」「身体」への欲望であったり、それらを通して、自己の中の存在感覚の深部の真実と「他者」を発見することでもある（「他者」「外部」がどのように構造的に描かれているかは、また別な問題であるが）。

尚、短編集『晩年の子供』における詩的文体やモチーフの細部等の意味と効果、ここで提示した方法的視点の有効性を他の作品系列との関係から検討すること等、課題や論じるべき部分は多い。これらについては他稿を期したい。

## 〔注記〕

1、富岡幸一郎・川村湊・竹田青嗣・栗坪良樹等に論じられているが、その視点や評価軸はいずれもまだ断片的部分的である。いわゆる、少女論の作品系列については言及される作品は限定されている傾向が強く、また、短編集『晩年の子供』についての作品論、方法や文体に着目しての論考等は管見の範囲ではみることができなかった。

2、本文の引用は、全て短編集『晩年の子供』（一九九一年一〇月、講談社）による。以下、本文の引用はページ数のみ示すこととする。

3、「あとがき」『せつない話（山田詠美編）』（一九八九年七月、光文社）

- 4、「(島森路子インタビュー)言葉があつて、私がいる」『広告批評  
一六一号』(一九九三年五月、マドラ出版)
- 5、「対談 山田詠美・吉本ばなな―恋愛小説のゆくえ―」『文藝』一九  
九二年文藝賞特別号▽』(一九九二年、河出書房新社)
- 6、「対談 小島信夫・山田詠美―『性』を視座として―」『文學界』一  
九八七年一月号▽』(一九八七年、文藝春秋社)
- 7、「対談 佐伯一麦・山田詠美―内面のノンフィクション―」『海燕』  
一九九一年八月号▽』(一九九一年、福武書店)